

# 山家の不老亭



▲不老亭の扁額

不老亭は、国道200号線沿い筑紫野市大字山家の福石という所にあります。

明和4(1767)年春、山家村浦の下、豪農山田本家の9代当主孫右衛門が本宅の東、長崎街道に面して隠居屋敷を新築し、この屋敷を「不老亭」と称しました。

不老亭の庭には、知名の由来となった、丸く大きな福石(富石ともいわれている)があり、座敷から眺めた庭には、七福神になぞらえた庭園があります。

明和8(1771)年辛卯2月、「富石不老亭山田木翁(孫右衛門が隠居後の号)誌之」と奥書のある『不老亭之記』に、隠居所を建てた由来が記されています。この場所に建設した理由については、第一に、東に熊ヶ岳という山があつて座敷の築山に見立てられること、第二に表の入口に珍しい大石があつて昔からこれを富石と言い伝えられていること、第三に前の川が清らかで意のままに庭の泉水に水を入れることができることなどがあげられ、泉水の中島に樹を植え、石を集めて全体を船の形にこしらえて、石を七福神に見立てて配置したとあります。

同書には、

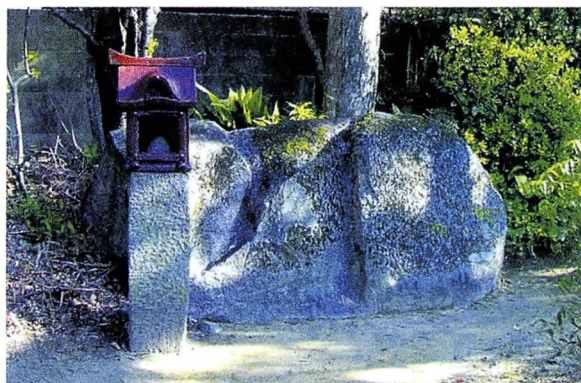
- 一番の船の舳先の石を恵美須石
  - 二番に横長い石を福祿寿石
  - 三番に中央に橋の心で立てた石を毘沙門石
  - 四番に横に悠々たる大石を弁財天石
  - 五番に松の葉かげの黒い石を大黒石
  - 六番に舟の舳にある石を寿老人石
  - 七番に中央に人の頭の形をした石を布袋石
- と名づけたと書いてあります。

明和8(1771)年2月、福岡藩第七代藩主黒田治之が領内巡視の際、2回立ち寄って休息し、庭を觀賞して和歌を詠んでいます。

年ふりし 庭の池水 岩称松  
所を得てや 亀もすむべき

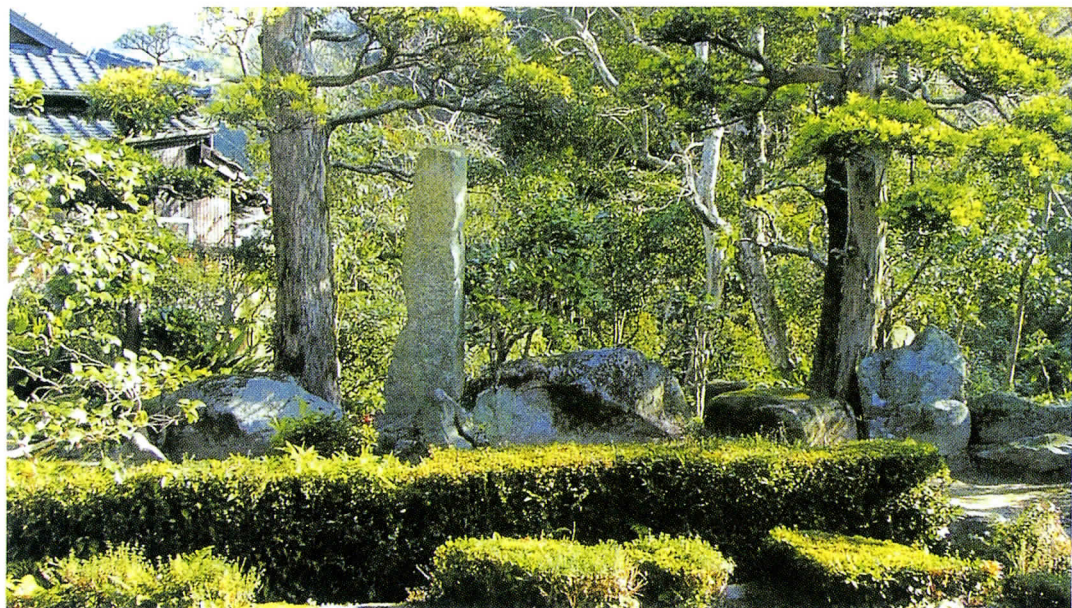
山田家は造酒屋でもあり、この和歌にある「岩称松」の句は、酒の銘柄として福岡の城下町で売り出しています。

また、藩主立ち寄りの記念として、福岡藩の儒学者亀井南冥を招いて『不老亭記』を書いてもらっています。

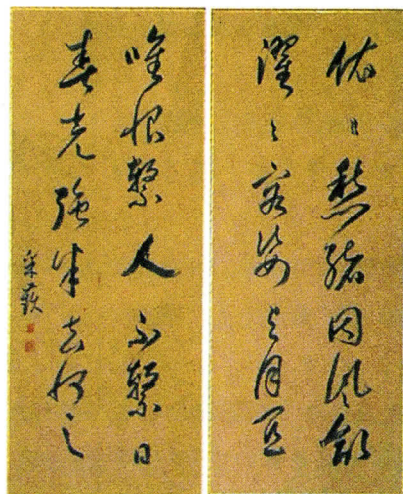


▲地名の由来となった福石(富石)

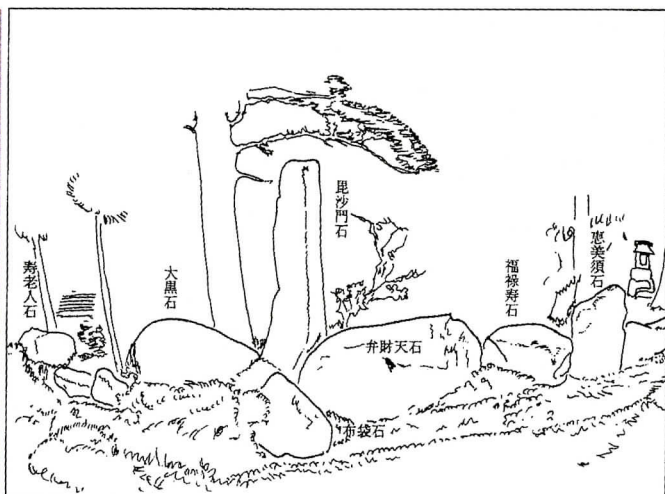




▲不老亭の庭



▲原采蘋の漢詩



▲庭の見取り図（近藤典二著『徳翁山田芳策伝』より）

不老亭の場所は長崎街道沿いにあり、評判は高く、鑑賞に立ち寄る旅人も多かったようです。また、木翁も旅人の話を情報源とするため、こころよく庭を見せたとあります。

山田本家12代当主勘右衛門の9男として生まれた山田得右衛門（幼名を篤之助といい、隠居後は芳策と称した）は、安政元（1854）年8月に、この地に家屋を新築し分家していま

すが、庭園は当初のままで、現在も優雅な趣を呈しています。得右衛門は、安政2（1855）年10月から明治3（1870）年10月まで、山家村庄屋を勤めた人です。

なお、座敷の襖には山家宿駅で私塾を開いていた、秋月藩儒学者である原古処の娘原采蘋の漢詩が書かれています。

（深町希彦）